Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

高齢者医療を担う唯一の区立病院

⑬⓪ 台東区立台東病院（東京都台東区）

病院と老健が一体化した施設

かつて吉原遊郭が置かれていた東京・台東区千束。その地に、明治44年（1911年）、性病防止を目的とした吉原病院が発足、その後昭和34年（59年）には都立台東病院となり、地域医療を担ってきた。しかし、老朽化が進んでいた同病院は都立病院の再編整備の一環として、96年に廃止、解体された。

同病院の存続を求める区民の声が根強かったことから、都は新病院の建設を検討したが、都財政の悪化などにより建設は凍結された。そこで、台東区が病院跡地を都から譲り受け、23区で初めて区立病院を建設することにした。

同区は23区内で最も高齢化率が高かったため、新病院は「区内の高齢者医療を担う拠点」として、2009年に開院した。

地上8階、地下1階建て。総合診療科、整形外科、眼科、皮膚科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、リハビリテーション科の7科を備えている。病床数は120床（一般病床、療養病床、回復期リハビリテーション病床が各40床）。

同じ建物に区立の介護老人保健施設「千束」も移転した。入所定員は一般100床、認知症50床の計150床。

木材を多用し、温もりのあるロビー。コンサートも開かれる

岐阜県の山間の診療所医師や
宮城県の公立病院管理者の経験を持つ山田管理者

窓から東京スカイツリーを望む病室

PT、OT、STが充実しているリハビリテーション室

オープンな造りのスタッフステーション

地域連携相談室は地域内の医療や福祉に関わる
あらゆる相談に応えている

運営は地域医療振興協会に委託されており、いわば「公設民営」。同協会はへき地医療や地域医療を担ってきた自治医科大学のOBが中心になって設立。現在全国約60カ所の医療機関や老健施設の管理・運営を手掛けている。

病院と老健の一体的運営は施設経営を安定化させる。両方の管理者となっているのは山田隆司・同協会副理事長。山田氏自身も自治医大出身で、へき地医療を長年担ってきた。

山田氏は「へき地医療に携わってきた医師は総合的な診療能力がある。複数の疾患を抱え、原因が多岐にわたることが多い高齢者を診る医師として適している。当病院でも総合医を中心にしたチームによる医療を提供している」と述べる。

その上で、台東病院の特徴として「都市部の病院であって総合医が中心となって診療を行っていること、リハビリテーションが充実していること、地元の医師会や医療福祉施設と連携が取れていること」の三つを挙げた。

下町の在宅医療を支える中核病院として、地域住民に頼られる存在になっている。

地域医療の要「断らない病院」

⑬1 所沢明生病院（埼玉県所沢市）

周囲が森や住宅地に囲まれた丘の上に建ち、
地域医療のシンボル的な建物となっている

東京のベッドタウン、埼玉県所沢市の椿峰と呼ばれる丘の頂付近に、木々に囲まれた所沢明生病院がある。かつてニュータウンとして開発されたこの地域も、今は高齢者が多くなり医療機関が足りない状態だ。そのような中、同院では内科、整形外科、心臓血管外科など16の科を持ち、腹痛や発熱から救命救急まで、垣根を設けることなく患者を受け入れている。病床数は50床で、1日の外来診療は160件を超える。鈴木昭一郎院長は「24時間365日、医療を提供することで地域の方々に安心な生活を送っていただきたい」と話す。

同院は1989年の設立。2009年に「カマチグループ」が運営母体となった。そのときから一層力を入れるようになったのが、救急医療の充実だ。同院は第二次救急病院と位置付けられており、入院治療や手術を必要とする重症患者が搬送されてくる。その数は年間2779件。200 ～ 300床レベルの大病院に匹敵する。

数が多い理由は、受け入れ率の高さにある。通常の救急車の受け入れ率は80％ほどとされるが、同院では97％。地域では「受け入れを断らない病院」が代名詞として定着している。

ゆったりした落ち着きのあるロビー

ロビーには心の和む熱帯魚の大きな水槽や
タッチパネル式の情報端末も

車いすでも楽に使えるデザインのテーブルが並ぶ談話室。
窓からは素晴らしい景色が広がる

消防の救急隊からも信頼されている救急体制。
まずは救命救急室に運ばれる

病棟の廊下や病室にはさまざまな
絵画が。ポップな絵も飾られている

院外に移動することなく薬を受け取れることが好評な院内薬局

院内の設備では、まず目を引くのがゆとりのあるロビーだ。オレンジやクリーム色などの暖色系を基調に、ソファは落ち着きのある濃紺を採用。

そして、ロビーの一角、出入り口近くに、昨年2月から院内薬局を開局させた。病院前の道路は交通量が多く、院外薬局への移動には危険が伴うことと、患者の負担を減らすことが目的だ。

2階から4階の病棟の壁にはたくさんの絵画が並ぶ。漫画のようなタッチであったり、外国のポスター風であったり、南欧を想像させる繊細な油絵であったりとバラエティーに富んでいる。「明るい雰囲気づくりのために、院内の装飾をトータルでデザインしている」（鈴木院長）。一方で、個室はダークブラウンと落ち着いた風景画で高級感を醸すなど、アクセントがつけられている。

入院患者や家族から好評なのが、最上階である4階の談話室。大きな窓からは緑豊かな木々と近くには西武プリンスドーム、遠くには富士山を望める。治療から離れて気分転換ができるスペースだ。

鈴木院長がモットーとする「地域に信頼され、愛される病院」は、実績と工夫でしっかりと根付き、今後さらなる飛躍を目指している。